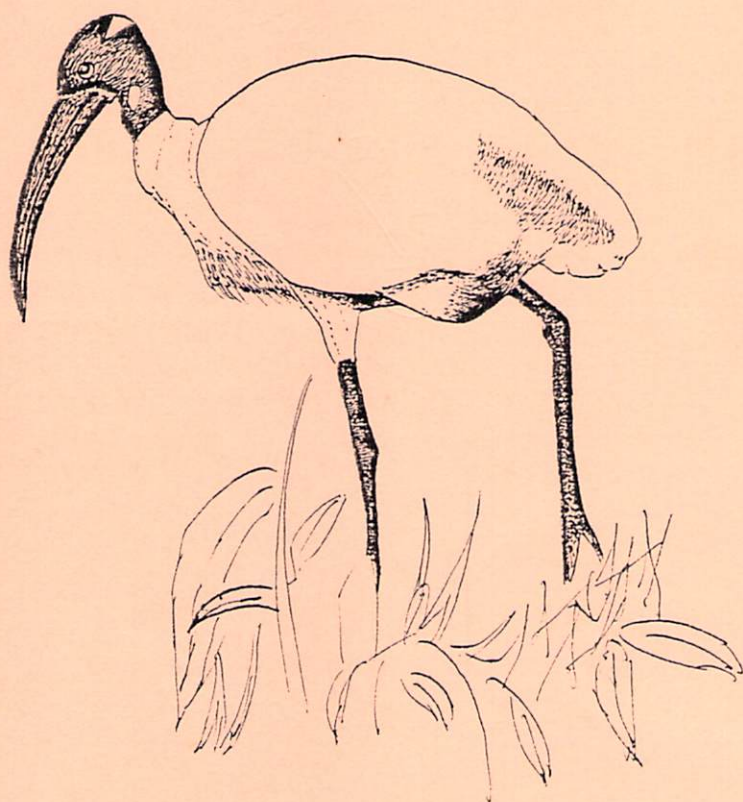


HITOTSUBATAGO No. 3

ヒトツバタゴ



長崎県生物学会対馬支部報

December

1985

フクリンオニユリの発見
国分英俊・岡部虎男

1981年3月26日、美津島町今里でツシマジカの調査のおり、偶然にもフクリンオニユリを発見したので報告しておく。

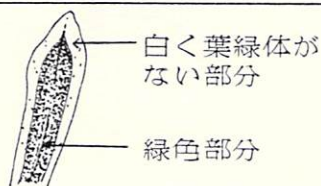
日本に自生しているオニユリは、3倍体のものがほとんどであり、当然のことながら種子はできないとされている。したがって、繁殖は珠芽(ムカゴ)か木子であり、栄養繁殖のため変化のある花、フクリン等はほとんど生じることはない。ところが、1978年の野田昭三氏の「対馬のオニユリ2倍体、3倍体とオウゴンオニユリの分布」によると、対馬に自生するオニユリの約75%は2倍体、あとの25%が3倍体であるとしていることから、このフクリンオニユリは、2倍体種子による突然変異により生じたと考えられる。

発見したときは2枚葉で育つかどうか心配したが、岡部が工夫を重ねた結果、1985年7月に開花をみることができた。花は普通花であった。オニユリのフクリンは、日本ではこれ一本であると思われるので大切にしたい。

繁殖は極端に悪く、珠芽はつくもののほとんどは葉緑体をもっておらず育たない。ただ、これを親として変化のあるオニユリを作出することも夢ではないと考える。

(巖原中学校)

フクリンとは葉の両はしの部分の葉緑体がねけ、まん中のみ緑色をしているものをいいます。特にフクリンが珍重されているものにカンラン、シュンランがあります。 — 国分 記 —



アオサギの生態
(*Ardea cinerea jouyi* Clark)
EASTERN GREYHERON



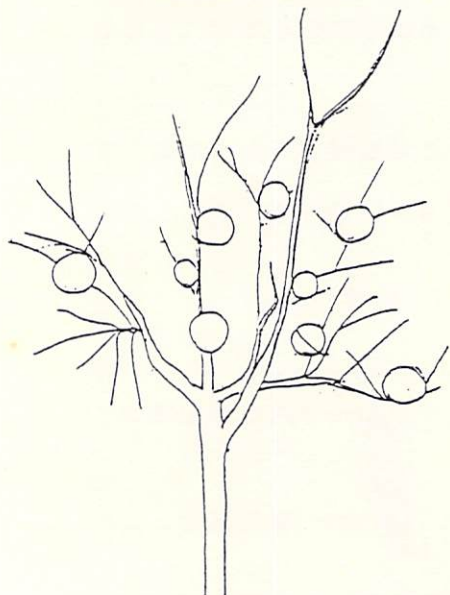
平山 俊章

形態： 巨大なサギで背面灰色、翼青黒色。嘴峰107 ~ 130 mm
・翼長417 ~ 475 mm・尾長157 ~ 188 mm・ 137 ~
172 mm、後頭に青黒色の長い飾羽あり、前頭には青黒色
の縦はんがある。そのほかの頭頸部と下面とは白、幼鳥
は、後頭の飾羽を欠く。

生態： 全国に分布し、まれならず。水田、沼沢地、池畔に生
息し、主として魚類・カニなどを捕食する。飛行は緩慢
で、グワー、グワーとなく。集団で営巣する。

(保育社「原色日本鳥類図鑑」より)

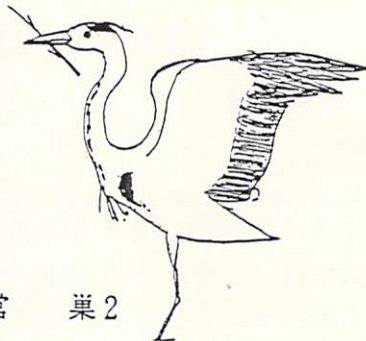
集団で営巣するのは、美津島町樽ヶ浜に近い小さな山の一
部で、その谷あいに残された原生林に、およそ40羽の
アオサギが集まってくる。巣は、原生林の中でも特に、よ
く枝をはった、しかも20mあまりの背の高い木を選んで
いる。巣は円形で、その直径はおよそ60~70cmで、
小枝を編むようにして作っている。木によっては、9個も
の巣が掛けられているものもある。(営巣1)



営 巣1

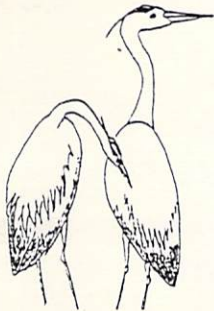


営

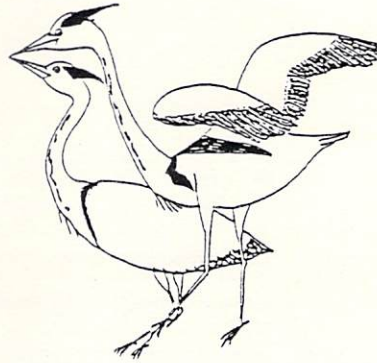


巣2

1月下旬～2月上旬になると、どこからともなく数羽のアオサギがこの地に集まってくる。アオサギの巣はとても丈夫で、昨年のもを補修して使う場合が多いようである。しかし同一個体が昨年と同じ巣を使用するかどうかは明確でない。オスが、巣材である小枝を運んでくると、巣で待っていたメスはこれを口ばしで貰い受け、巣に編み込みながら補修していく。補修は、^(営巣)単なる補強のためだけでなく自分たちの体型にあった形に直すためでもあろうと考える。



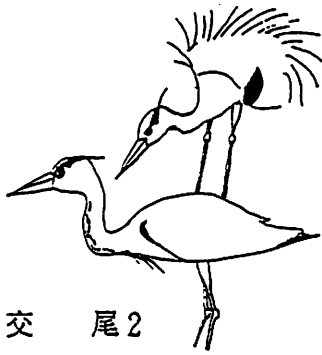
羽づくろい



交尾1

繁殖期（2月下旬～6月下旬ごろ）になると、オス・メスとも口ばしのもとの方が鮮やかな赤色を帯びてくる。この時期になると、オスはメスの羽づくろいをする行動が見られるようになる。これは、交尾への誘いである。（羽づくろい）

オスはやがてメスの背中の上に乗ろうとする。メスの欲求も高まっている場合はそのまま交尾にいたるが、そうでない場合は、オスが背中の上に乗ることを拒む。交尾は、夜間に限らず行われる。（交尾1）



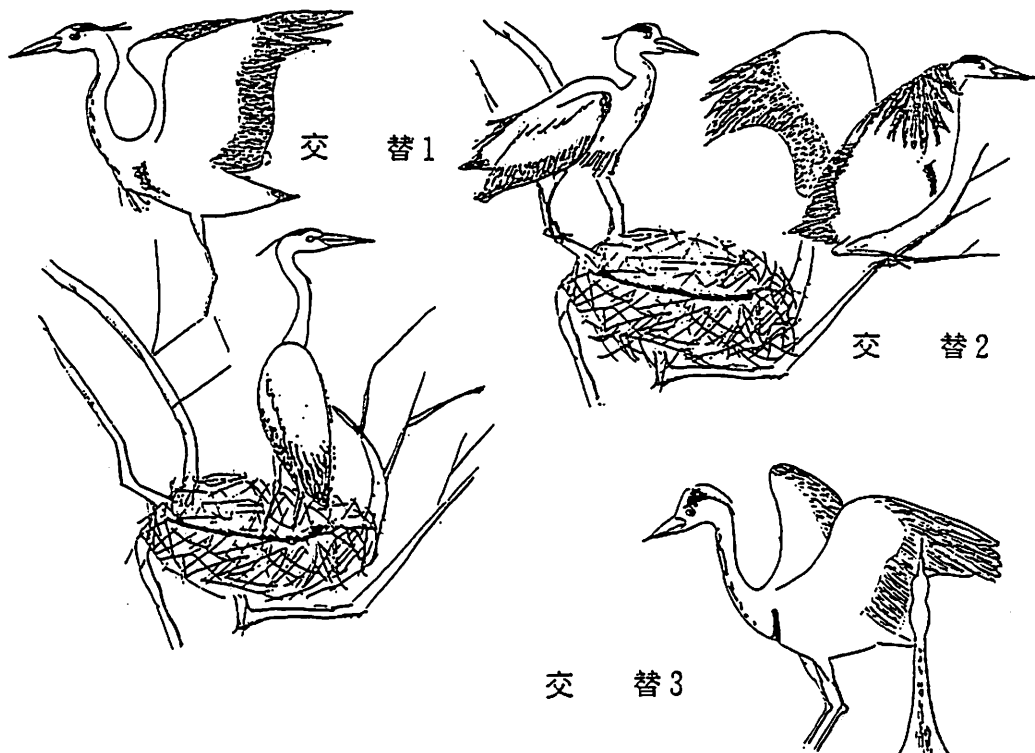
交尾2



交尾3

オスは、メスの首を口ばしではさみ、それから足を曲げ、尾と尾を近付けて交尾を行う。この行動で、オスがメスの首を噛むのは、メスがあまり動かないようにするためと、安定の悪いところにいる自分の姿勢の維持のためとおもわれる。交尾中、メスは大きな鳴き声を出すことが多いが、近くにいる他の個体はあまり関心を示さない。このようにして、繁殖期になると、営巣地は一段と賑やかになる。(交尾 2.3)

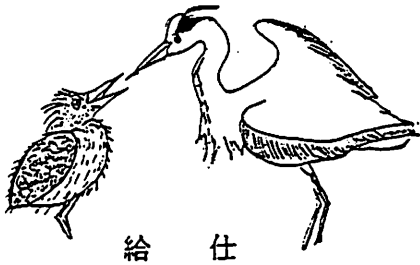
卵の大きさは、ほぼニワトリの卵と同じ程度で、キジの卵の色に似て淡い緑色をしている。産卵数は、3～4個ぐらいだが、無事巣立っていくのは、そのうちの半分程度である。



卵や雛は、オスとメスが交替で温める。餌場が遠い上に、餌取りも容易ではないため、交替相手が帰ってくるまで3～4時間巢に座ったままであることもめずらしくない。餌取りから帰ってきた個体は、巢の中でなく巢の近くの枝に降りる。巢で帰りを待っていた個体のなかには、この時(交替1)空に向かって鳴く行動を見せるものもいる。それは、あたかも無事の帰巢を喜んでいるようにも見える。(交替3)やがて、巢にいた方の個体が枝先に進み、飛びた(交替2)ていく。先ほど帰ってきた個体は、空いた巢の中へと進み、卵や雛の位置を直しながらしゃがみこむ。

雛は、口ばしも体の色も青黒色をしている。親鳥が餌場から帰ってくると、鳴きながら餌をねだる。親鳥の口ばしにとどく時には、自分の口ばしでそれを噛むことを繰り返す

餌を要求する。親鳥は、このままの状態でも餌を口移しに与えることもあるが、巣の中に肉片らしきものをもどして与えることもある。これは、雛の成長や体調により変わるものと思われる。(給仕)



給 仕



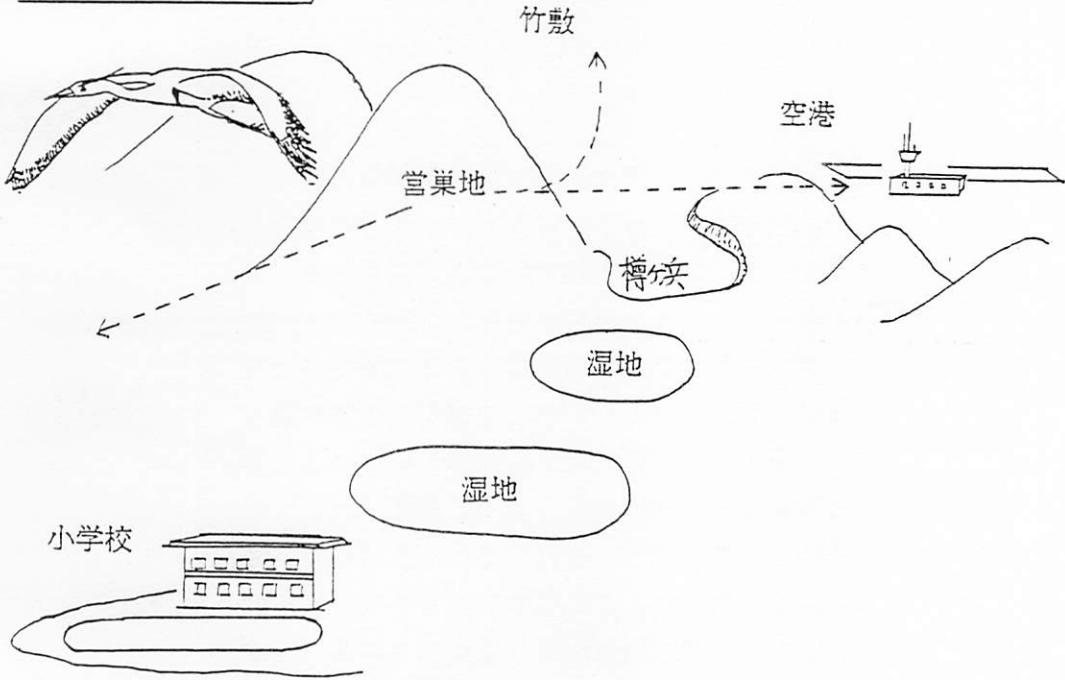
外 敵

下からの外敵としては、テン・イタチが考えられるが、あまり糞を見ないことや、巣がかなり高い所にあることからあまり心配でない。ところが、営巣地の上空にはいつも、トビが数羽飛び回っており、雛を狙っている。何かの理由で親鳥がいなくなったすきを狙っているようである。しかし、トビの中には親鳥がいても平気で雛に襲いかかるものもいる。この場合、親鳥はトビへの威嚇のためか、恐怖を感じてか、頭の飾羽を逆立てて警戒音を出す行動をとる。中には、恐怖のためか巣を離れる親鳥もいて、雛はあっそう危険にさらされる。(外敵)

威嚇は、頭の飾羽を逆立て、激しく鳴きながら相手をつつこうとする行動で表現されるが、相手に直接けがをおわせるような攻撃はしない。巣を留守にしている間に他の個体が侵入している場合には空からいきよよく飛びかかっていくが、侵入者はすぐに退散するし、追う方も深追いはしない。



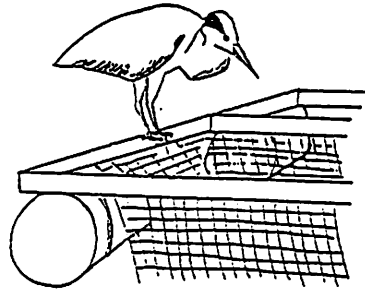
威 嚇



営巣地から餌場に向かうコースはだいたい決まっており、
 鷄鳴小学校の上空を経て根曹のほうへ飛ぶコース、樽ヶ浜
 の上空を経て竹敷や大船越のほうに飛ぶコースである。



餌 場 1

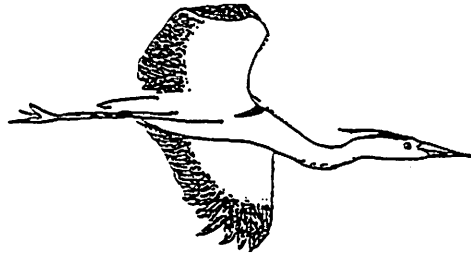


餌 場 2

餌場は主に湿地である。対馬には、水田と海岸との境に、ちょっとした湿地があり、ボラの稚魚やカニなどが生息している。アオサギは、このような場所によく見られる。また、営巣地の傍らには大きな湿地があり、フナやカニが生息している。巣立ったばかりの幼鳥は、ここで捕食の仕方を覚えているようだ。しかし、この湿地は側に道路が通っており、頻りに車の往来があるため、成鳥が昼間にここを利用することはほとんどない。この場所に巣まったアオサギは40羽を越えるのに比べ、それをまかなうだけの湿地は十分でない。そのためか、この地のアオサギは、淡水性のものばかりでなく、海水性の魚類も捕食している。真珠養殖のための浮き玉の上にとまったり、魚養殖のいかだに降り立ち、いけすの魚を狙っている姿を見かけることもある。海水性のものを捕食するため、山の中にある営巣地は潮の香が漂っている。



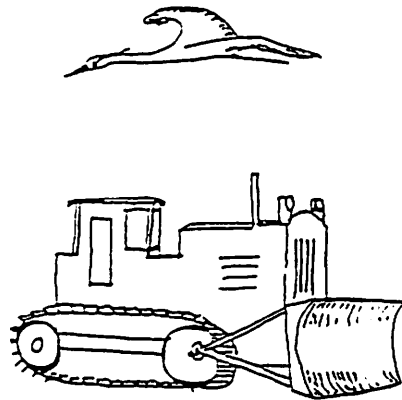
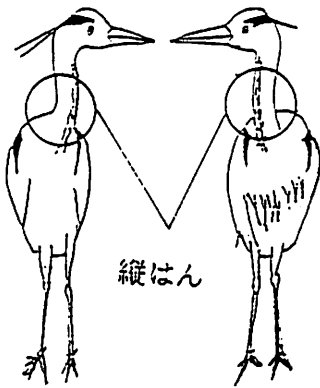
飛行姿勢 1



飛行姿勢 2

飛行を始めてしばらくの間や巣等に降りる時、アオサギは首を伸ばしているが、遠距離の飛行をするときは、これを縮めている。首を縮めた飛行姿勢はサギ類特有のものである。離・着陸の際首を伸ばす理由は、二つ考えられる。一つには、人間やネコ等がそうであるように姿勢のバランスを取るためである。もう一つは、体の大きさの割に尾羽が小さいことから考えて、アオサギの尾羽は、進行方向を変えるのにはあまり役立っていない。このことからあの長い首が、その役目を補っているものと思われる。ツル等の大型で巨大な鳥の尾羽が短いのは、そういうことによるのかも知れない。逆に、首の長いことが尾羽の必要性を減少させ、短くなったのかも知れない。

個体識別は、今のところできていない。しかし、肉眼による観察では、のどのところにある縦はんが個体によって違っていることがわかっている。今後、超望遠レンズを使ってその縦はんの部分进行分析してみたいとおもう。個体識別が明らかになれば、これまで知られていない、ペアの形成や個性など、よりくわしい行動がわかるようになるだろう



先に、営巣地のすぐ近くに広い湿地があることを書いた。
しかし、11月現在、二つある湿地のうちの一つが、道路
拡張の理由のもとに埋め立てられつつある。この湿地は餌
も多く、毎日のようにサギの仲間を見ることができた。
アオサギにとっても、ここは採食場としてとても重要な湿
地であった。11月中に、この湿地は埋めつくされるだろ
う。それに、もう一つの湿地も、住宅建設のために埋め立
てられてしまう日は遠くない。集団営巣地として、アオサ
ギがこの地を選んだ要因の一つであるこの湿地がなくなっ
た時、アオサギは、原生林があるという要因だけで、はた
してまた、この地に集まってくるだろうか。

(鶏鳴小学校)

野鳥の声のききなし
浦田明夫

明りょうで余り長くない野鳥の鳴き声、ふしまわしを人の言う言葉や文句におきかえて言うことがあり、これを「ききなし」といっているが、この「ききなし」を知っていれば、同じ場所に数種類の鳥が鳴いている時、それを識別でき、順次聞いているうち聞きわける範囲を広げることができるようになる。

ところでバードウォッチングは野外で生活している鳥の姿を見たり、鳴き声を聞き、楽しむ趣味で、近年老若を問わずかなり浸透している。それにはやはり鳥の鳴き声を聞き覚えたり、その姿を双眼鏡で確認し、野鳥の名前を知ることが、更に興味を倍加することができる。そこでバードウォッチングを楽しむために、以下よくいわれている「ききなし」をひろい集めてみた。しかし、自分で自分なりの「ききなし」をつくるのが野鳥の鳴き声を識別できる最大の方法と思う。

イカル

冬期山ろくに群がみられる。「お菊24」とききなされる。

オオヨシキリ

池畔や川辺の芦原から姿を見せるが数は少ないようで、その鳴き声は「ギョン、ギョン」ときこえる。

カッコウ

5月にやってくる夏鳥。「カッコウ」と聞こえる。鳴き声そのまま和名となっている。

カラス

「カーカー」なじみの深い鳴き声。

コジュケイ

対馬には近年放鳥され、現在全島に広く見られるようになった。

「ちょっとこい、ちょっとこい」と聞こえるが、「かあちゃんこわい」とききなされることもある。

コノハズク

「ブッポウソウ」とききなされるところから、真のブッポウソウとまちがえられ、声のブッポウソウといい、真のブッポウソウを姿のブッポウソウともいう。

サンコウチョウ

対馬の森林内で見られる夏鳥であるが、全国的にも対馬はその個体群密度の高いところとして知られている。「月日星ホイホイ」ときこえる。

ジュウイチ

「ジュウイチ、ジュウイチ」ときこえ、カッコウと同様、鳴き声が和名となっているが、「ジヒシン、ジヒシン」ともきこえるので「慈悲心鳥」ともいう。夏鳥である。

センダイムシクイ

CMでもでてくるほど有名になったが、「ショウチュウ一杯グイー」である。

トビ

カラス同様なじみ深い「ピーヒョロロ、ピーヒョロロ」である。

ヒバリ

「ピーチク、パーチク」と普通言われているが、「日一步、日一步」とか「利取る、利取る」とも鳴くという。

ホオジロ

この鳥は全国的に分布し、普通の鳥だけに「ききなし」も多いもの

の一つである。「一筆啓上つかまつり侯」「源平つつじ白つつじ」など著名なものであろう。「あっとおどろく為五郎」「サッポロラーメンミソラーメン」などは最近のものである。

ホトトギス

「特許許可局」「てっぺんかけたか」などがある。また「弟来たか」と聞こえる。青葉のころ飛来する夏鳥である。

メジロ

「長兵衛、中兵衛」と聞こえる。もちろん留鳥。

メボソムシクイ

「銭取り、銭取り、銭取り、銭取り」と4回くりかえすことが多い。

コウライキジ

「ケン、ケーン」とするどくなく。

以上、対馬の鳥類についての「ききなし」を記してみたが、なお自分流に「ききなし」をつくりバーウオッチングを楽しむのも方法であろう。

(県立対馬高校)

ランの無菌培養のすすめ

最近野生ランの栽培が大変さかんで、山野の自生地が次々になくなり、なげかわしい限りです。そこで、時間はかかりますが、大量に増やすことのできる無菌培養をやってみられてはいかがでしょうか。方法は簡単で、家庭でも十分にできます。

くわしくお知りになりたい方は国分まで御一報ください。資料をお送りします。

TEL. 09205-2-5644 国分

対馬におけるナガサキアゲハの分布
境 良 朗 ・ 杉 憲

ナガサキアゲハ (*Papilio memnon* LINNAEUS) は、東洋の熱帯・亜熱帯に広く分布し、日本はその北限にあたる。国内では、日本海側では石川県金沢市、太平洋側では紀伊半島南部を北限とするが、さらに分布域は北上の傾向にあるという。

長崎県内では、本土に広く分布しているが、離島では五島・対馬で少数が記録されているにすぎず、壱岐からの報告はない。

本種の食草が、ミカン科 (ミカン亜科) とりわけ、ウンシュウミカン、ナツミカン、ユズなどの栽培種に限られているため、その分布様式もこれらの食草となるミカン科植物の人的影響を大きく受けながら、現在に至っているものと思われる。

本種の♀は、産地が南にさがるほど白化の傾向が強くなる現象が認められているが、対馬産においては、長崎県本土産とほぼ同等の発現状態であり、地理的変異はみられない。また、そのような報告もない。

ただ一例、1984年9月中旬

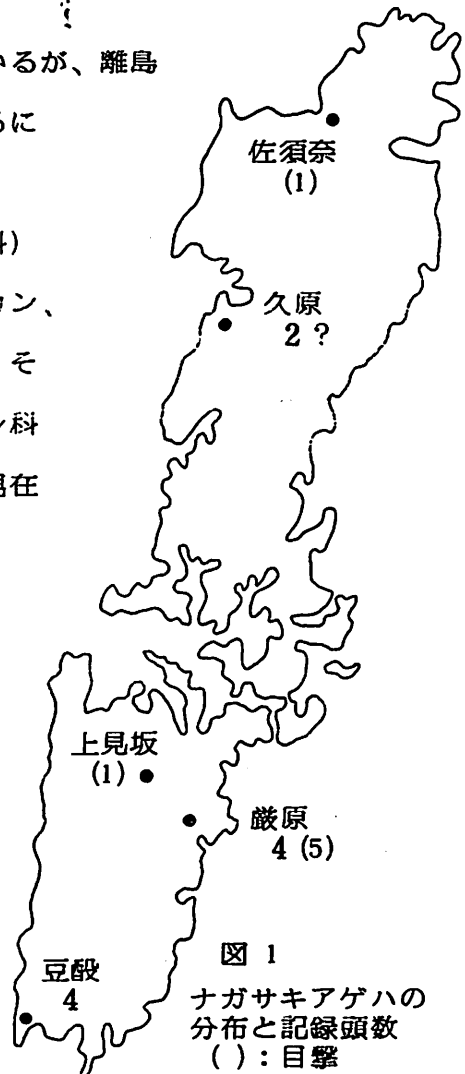


図 1
ナガサキアゲハの
分布と記録頭数
(): 目撃

ごろ、巖原町宮谷において、数日にわたって斉藤修二氏によって目撃された個体は、今回記録する2個体に比べて、はるかに白色リンが発達したものであったという。

氏の話によれば、沖縄産と西表島産の間ぐらいだったということである。この個体は、ヒガン花で吸蜜したり、ナツミカンへの産卵行動（実際に産卵したかどうかは不明）が観察されたが採集には至らなかった。

このことは、対馬にもともと分布していなかった本種が、ミカン栽培の拡大にともなって人為的に持ちこまれ定着したものか、あるいは、いわゆる迷蝶のように九州本土北部またはそれより南方の地域からの飛来によるものか、という問題を一層複雑にしてしまった。人為説が有力であるとしても、どちらか一方ではなく、一部両方の個体群の交雑も考えられないこともなく、今後の課題としたい。

現在までに報告された記録とあわせて、今回新たに3例追加しておく。

- (1) 1951年7月26日 豆殻 1♀ 上原忠男
- (2) 1955年8月20日 久原 (採集頭数不明) 津田美智夫 ※1
- (3) 1956年9月1日 巖原 2♀ 吉田政他 ※2
- (4) 1967年8月5日 佐須奈 1♂目 中西元男
- (5) 1974年7月20日 上見坂 1♂目 林田慎一郎
- (6) 1974年7月31日 巖原 1♂ 境良朗 ※3
- (7) 1974年8月5日 巖原 1♂目 中島満
- (8) 1974年8月9日 巖原 1♂目 中島満
- (9) 1974年8月9日 万松院 2♂目 田代博人
- (10) 1975年7月27日 有明山山 1♂ 一瀬誠
- (11) 1976年9月5日 豆殻 1♀ 浦田明夫
- (12) 1984年9月中旬 巖原 1♀目 斉藤修二
- (13) 1985年9月14日 豆殻 1♀ 杉憲
- (14) 1985年9月15日 豆殻 1♀ 境良朗

以上の7/4例を図1にまとめた。

- ※1 浦田 (1977, 1978) によると、少なくとも1♂1♀の2頭以上が採集されていることは確実と思われるが、正確な記録は不明である。
- ※2 もう一人の記録者が不明である。
- ※3 浦田 (1977) では7月3日、同 (1978) では7月4日として報告されているが、今回の記録に訂正しておく。

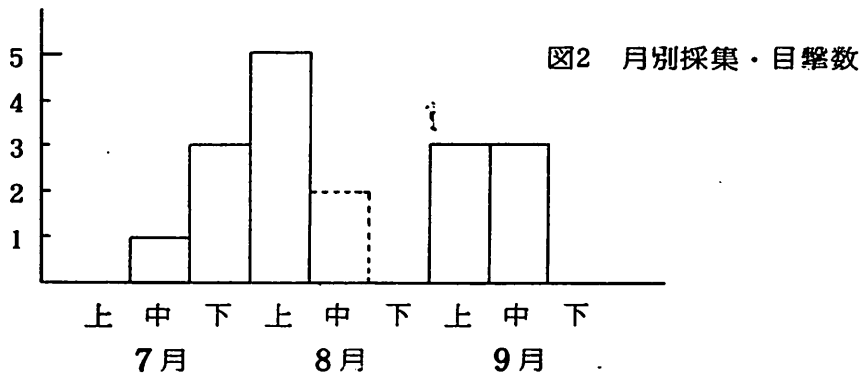


図2 に示すように、対馬においては7月中旬～8月中旬、9月上旬～中旬にかけて記録が集中しているのがわかる。本種の通常の周年経過から考えると、これは第3化から第4化の個体と思われる。したがって、今後4月中旬から6月下旬の調査に期待をかけたい。

杉は、前記の1♀から採卵を試み、ナツミカンを使った加温状態の中での飼育の結果、5♂3♀が羽化、20蛹が越冬中である。羽化した個体はいずれも小型であった。飼育時に幼虫の半数近くが死亡したことから、対馬においてナツミカンは良好な食草といえないのかもしれない。また、羽化した原因として加温条件が考えられ、おそらく自然状態では、9月中旬ごろ産卵されたものはそのまま蛹で越冬し、翌春、第1化として発生するのであろう。

(境 : 北部小学校)

(杉 : 久原小学校)

ツシマジカは害獣か!!
国分英俊

最近のツシマジカについての害獣あつかいははなはだしく、ある新聞にはスギ、ヒノキの被害はもとより、発情期のオスの鳴き声で、上県町西海岸、上対馬町東海岸では夜も眠れないと不満が出ている、と紹介している。また、生息予測も疑問符をつけながらも一万頭としている。

スギ、ヒノキの害については確かにあるが、それも地域的に大きな差があり、一概に被害が全島におよんでいるとはいえないようである。被害木の数についても、過年度からの累積数の報告のようであり、本年度に被害をうけた数も早急に調査するがあるのではないかと考える。

県生物学会、九大の科学的データに基づく調査では、全島の生息数を約800頭と予測している。したがって、前記の一万頭とは数値がはなはだしくかけ離れており、そのまま信用することはできない。

ツノトギの被害が集中している美津島町、上県町の林業者の怒りも、筆者自身、被害を見ているだけによくわかるが、それにしてもツシマジカを人間の一方的な勝手な見方により害獣あつかいし、種の存続そのものを脅かすやり方にいかりを感じるものである。

(巖原中学校)

ツシマジカ *Cervus pulchellus* IMAIZUMI
昭和4 / 年に県の天然記念物に指定されたが、最近、一部の地域のみ
の指定となった。本州、九州のシカと異なり (角の分岐、鼻骨の形
眼)、化石に出てくムカシジカに近いといわれている。

— 国分記 —

新しい対馬の帰化生物 浦田明夫

帰化生物とは、本来の生育地から何らかの方法で移入され、その地域で土着の生物と化したものを帰化生物と呼んでいる。ヨーロッパのように、いくつもの国が直接陸続きで隣り合っている場所では、本来どこまでがその生物の生育地なのか境界線を決めるわけにはいかないが、我が国のように、周囲を海でかこまれた地域ではその概念もわかりやすいが、要するに自然状態で成立した本来の分布地から他の未分布地域へ移っていき、そこで自然繁殖をするようになった生物が、いわゆる帰化生物である。これは歴史的に非常に古いものから比較的新しいものまで、それぞれの帰化の歴史はさまざまである。近年、今までに見ることのできない外国産の生物が知らない間に眼にとまったり、話題になることがある。対馬のような離島では比較的少ないと思われるものの、人為的な持ちこみで繁殖している数種の生物を紹介することにする。

セイトカアワダチソウ

セイトカアワダチソウは北米原種で、第二次世界大戦前には我が国では見られなかった植物であるが北米から輸入物資にまじって入ってきたものと思われている。福岡市では20年前にすでに普通な植物となっているがそれより西へ進むと少なくなり佐賀、長崎の鉄道沿線に少しずつ見られる程度であった。しかし、10年位前には、長崎市では、長崎東高校の通学路、筆者の長崎の自宅の赤迫町には群生するほどの状態にまで繁茂するようになっている。筆者は、米国のバージニア州からワシントンDC、ニューヨークに行く途中、この植物の自生地を見たが、大きさ、生育状態は日本の方が数段まさっているように思われた。

これは、帰化した日本の方が生育により好適地であったためと思われる。

さて、このセイタカアワダチソウを最初に気付いたのは、10数年前で厳原町のバス路線沿いであったが、ある新聞社が帰化植物の問題を取り上げた時、筆者のもとに取材に来たのでそれを記事にしてもらったことがある。その後は筆者の長崎での生活のため、見出すことができなかったが、1985年10月31日、久しぶりに美津島町で、わずか一株であったが見つめることができた。繁殖力のおう盛な植物だけに、今後さらに分布を広げるものと考えられる。

アメリカザリガニ

日本に渡来したのは1930年であるが、長崎県内には1950年代に移入した。諫早、佐世保、川棚など比較的多いようである。対馬にいつごろ入ったのかさだかでないが、厳原町で明らかに帰化し繁殖をくりかえしている。現在、筆者は厳原で捕獲した各ステージのアメリカザリガニを飼育している。なお、美津島町高浜でもえられている。

ウシガエル

ウシガエルはアメリカロッキー山脈東部地帯が原産地で、1918年に輸入されたが、全国的にまた長崎県内にも分布を広げていった。県本土はもちろん、五島にも見られる。対馬では1963年10月に厳原で捕獲された1個体が唯一であるが、この標本は筆者が保管している。その後、1983年、中学生が北九州から持ち帰った2頭のウシガエルを成相寺の池に放したところ、それがふえているもようである。

(県立対馬高校)

トロボの摂食行動に関する知見 境 良 朗

トロボは肉食の昆虫である。捕食の対象となるのは主にブユ、蚊などの小さな昆虫類が多いが、アブの仲間や蛾や蝶、ときにはトロボ同士が捕食し合っているのを見かけることがある。

本年（1985）次の2例を観察することができたので報告する。トロボの生態面では、摂食に関する報告は極めて少ないので、野外で観察する機会に恵まれたら是非公表していただくようお願いしたい。

(1) トラフシジミを捕えたシオカラトロボ

・ 1985年6月1日 美津島町大山付近 晴れ 風弱し

14時ごろ、シオカラトロボ♂「テネラル」が地上約2.5mを飛ばし、中のトラフシジミ「性別は不明」を捕え、近くのイネ科植物にとまった。とまった位置は地上約1m。記録のため写真におさめたが、トロボが蛾や蝶を捕食する場合、はたしてリン粉のついた翅まで食べるのか調べなかったことが残念でならない。

(2) ウ斯巴キトロボを捕えたギンヤンマ

・ 1985年10月14日 美津島町鶏知ダム付近
雲時々晴れ 風弱し

縦10m、横4mほどの草地の上を5~6頭のウ斯巴キトロボが群飛していたが、どこからともなく現れた1頭のギンヤンマ♀「成熟個体」がその中に侵入。地上約50cmほどを低空で2、3回往復飛しょうをした後、突然上昇し1頭のウ斯巴キトロボを捕えた。ギンヤンマは6本の足でウ斯巴キトロボの胸部背面をとらえ、両者は回転しながら落下した。地上に落

ちると、すぐにギンヤンマは体勢をたて直し、地上約30cmの草の茎にとまった。その時、すでにギンヤンマはウスバキトンボの頭部と胸部のつけねをかみくだいており、20秒ほどで頭部が離れてしまった。その後、胸部を摂食したが、まだウスバキトンボの翅が小ささみに震えているのが印象的だった。

その他のウスバキトンボは、捕食の瞬間やや驚いたように散ったが、すぐに平常の飛しょうにもどった。ここで時間がなく観察を中止したが、トンボがトンボを捕食するのは、やはり見ていて異様な光景であった。自然界の厳しさをみたような気がする。

(美津島町立北部小学校)

HITOTSUBATAGO No. 3

ツシマヤマネコ の 目撃記録

江島 正 郎 ・ 蒲 地 伸 一 郎

ツシマヤマネコは夜行性のため、野外で発見することは極めて難しい。筆者の一人、江島も4年間の在島時やその前後に何度か調査で渡島しているが、一度も見たことがなかった。

本年(1985)8月16日、20時35分ごろに、上県町佐護で、車のライトに驚き、路上から冠水中の水田へ姿を消した成体〔性は不明〕を1頭目撃した。頭部の黒線やイエネコに比べて小さな頭部、長い尾によって容易に本種と同定できた。

(県立長崎北場台高校)

対馬のセイタカアワダチソウとウシガエル
江島正郎

セイタカアワダチソウ (*Solidago altissima*)は全国の路傍でごく普通に見られる外来種である。

対馬ではごく最近まで見られなかったようで、外山・松林 (1976, 対馬の生物, p. 89-123) にも種名が挙げてないが、邑上 (1985, 対馬の花Ⅱ, p. 114) に初めて「巖原,他」として記録された。

筆者がこの種を初めて見たのは / 978年7月下旬 [たぶん7月28日] で、峰町上里であった。当時は国道わきに数本見られたただけであったが、翌年には / 0株 [/ 979年8月6日] に増えているのが観察された。 / 979年7月くらいからは巖原町阿須 [八重島採石場横] をはじめ、巖原港付近で発見できたが、本年 [/ 985年] には島内 / 0ヶ所くらいで自生しているのが判明した。

対馬の国道沿いでは急速に分布地を拡大するものと思われるので、今後の調査が必要であろう。

一方、ウシガエル (*Rana catesbeiana*)もセイタカアワダチソウ同様、各地に分布を拡げている種である。対馬では / 963年7月に巖原町矢良で / 頭採集 (ハ虫両棲類学雑誌, 2 (2) : 14 ; 浦田, 1969, Tsushimanus, (3) : 4) されただけで、その後は土着し得なかったようである。

本年 [/ 985] 8月に、下記のように観察した。

・ 1985. 8. 15 上県町佐護 幼生多数

・ 1985. 8. 19 美津島町樽ヶ浜 幼生多数

前種同様、本種も分布を拡大していくであろう。

(県立長崎北陽台高校)

ムツボシアシナガハナアブの記録

境 良 朗

ムツボシアシナガハナアブ (*Milesia oshimaensis* SHIRAKI)は、腹部に6つの黄色紋を有し、体長が20mmを越す大型の美しいハナアブである。本種を対馬から初めて記録したのは池崎 (1976, 対馬の生物, p. 336 カラー図版 33) で、厳原町万松院、有明山、久田向山を産地としてあげ、生態に関する知見を述べている。

本年 (1985) 豆舂崎において、ノ頭採集することができたので報告しておきたい。

・ 1985年9月15日 / ex 厳原町豆舂崎

この個体は、地上3mほどのエノキ?の付近を hovering していたもので、しばらく観察していると、この木にまきついていたヘクソカヅラの花に数回訪花したが、下から見上げる形の観察であったので実際になめる動作をしたか確認できなかった。

(北部小学校)

キツネノマゴの白色花

浦田明夫

キツネノマゴは野原や道傍に普通にみられる一年草である。蝶に興味をもっているものには、迷蝶アオタテハモドキの食草として知られており、筆者もアオタテハモドキ飼育のため、この植物に気をつけていたところ白色花を見つけることが出来た。本種は枝の先に長さ1~3cmほどの穂状花序をつけ淡紅紫色の花をつけるのが普通である。植物には変異的に白色花を時々見かけることがあるが、これもその一つであろう。それほど珍しいものではないかもしれないが記録しておく。

キツネノマゴの白色花

昭和60年9月23日 豊玉町 麦 30cm²の株

(県立対馬高校)

シロバナツユクサの記録

江島正郎

ツユクサ (*Commelina communis*)は県下各地にごく普通な種である。この種の白花を f. *albiflora* シロバナツユクサと称し、県内各地や嵯岐で記録されている。

筆者は1984年7月30日、上県町佐護で目撃〔約10株〕したので報じておきたい。

尚、ケイリンギボウシ (*Hosta minor*)の白花 f. *alba* シロバナケイリンギボウシも巖原町有明山山頂付近で1977年8月6日に1株採取したので付記しておく。

北部小学校・校区内で得られた昆虫類について

～佐須奈での記録も含む～

境 良朗・築城正彦・犬束卓也・藤田恵美

小茂田悦子・園部浩史・大谷 恵・大西信行

原田美由紀・城戸加奈絵・浦瀬節子

北部小学校生物クラブでは、本年度の活動として、校区内に分布している昆虫類の調査を行ってきた。本校では、週4時間の「ゆとり」の時間のうち/時間を文化的活動「文化クラブ」として位置づけている。

しかし、小学校のクラブ活動であるから、採集用具の不備、時間の制約同定能力等々の問題があり、十分な成果をあげることができなかった。

目録には、同定上少しでも疑問の残るものは除外し正確なものにとどめた。したがって、多数の未同定種があるが現状ではやむを得ない。気軽に同定を依頼するところがないためである。そのような場を生物学会や昆虫同好会がお世話をしてくだされれば、小学校児童でも十分に生物研究に寄与できるものと信じる。

{ 校区内： () に番号
校区外： ○印
新鮮度： IV～I

I. 採集目録

1. 蝶類

- (1) イチモンジセセリ 5月10日 lex 芦浦 藤田恵美 (初見)
5月22日 lex 芦浦 藤田恵美
- (2) クロアゲハ 6月16日 1♂ 芦浦 大西信行
- (3) モンキチョウ 5月11日 1♂ 小船越 築城正彦 (Ⅱ)
5月10日 1♀ 芦浦 藤田恵美
- (4) モンシロチョウ 6月14日 1♂ 芦浦 大谷恵

- (5) タイワンモンシロチョウ 5月18日 1♀ 芦浦 大西信行
- (6) キチョウ 6月16日 1♀ 芦浦 大西信行 (越冬個体)
- (7) アカシジミ 6月15日 1♀ 芦浦 原田良二 (Ⅱ,新産地)
- (8) ベニシジミ 5月10日 1ex 芦浦 藤田恵美
5月24日 1ex 芦浦 犬束卓也 (Ⅳ)
- (9) トラフシジミ 6月6日 1ex 芦浦 小茂田悦子 (Ⅳ,夏型)
- (10) ヤマトシジミ 5月10日 1♂2♀ 芦浦 藤田恵美
5月31日 5exs 芦浦 原田美由紀
6月28日 1ex 芦浦 城戸加奈絵
- (11) ツバメシジミ 6月14日 1♂ 芦浦 大谷恵 (Ⅱ)
- ツシマウラボシシジミ 6月16日 2exs 大星山付近 築城正彦
- (12) コミスジ 5月3日 1♂ 芦浦 原田美由紀 (Ⅳ)
- (13) アカタテハ 7月7日 1ex 賀谷 大谷恵

2. 蛾類

- (1) トラフヒトリ 5月17日 1ex 芦浦 藤田恵美
- (2) アカヒトリ 6月28日 1ex 芦浦 小茂田悦子
- (3) キアシドクガ 6月14日 1ex 芦浦 藤田恵美
- (4) ウメスカシクロバ 6月14日 1ex 芦浦 原田美由紀

3. セミ類

- (1) ニイニイゼミ 7月23日 1♂ 賀谷 藤田恵美
- (2) ツクツクホウシ 8月2日 1♀ 賀谷 藤田恵美

4. カメムシ類

- (1) ヨコツナツチカメムシ 6月21日 1ex 芦浦 築城正彦
- (2) ホソヘリカメムシ 5月16日 2♀ 芦浦 築城正彦
5月31日 1♂1♀ 芦浦 築城正彦
- (3) ツマキヘリカメムシ 5月17日 1ex 芦浦 築城正彦
- (4) ハラヒロヘリカメムシ 5月17日 1ex 芦浦 藤田恵美
- (5) シマサシガメ 6月28日 1ex 芦浦 犬束卓也
- (6) エサキモンキツノカメムシ 6月29日 1ex 賀谷 藤田恵美
- (7) アカスジカメムシ 6月29日 6exs 賀谷 藤田恵美

(8) ホオズキカメムシ 6月29日 1ex 賀谷 藤田恵美

5. トンボ類

- (1) ハラピロトンボ 5月10日 1♂ 芦浦 築城正彦
2♀ 芦浦 藤田恵美
5月31日 1♂1♀ 芦浦 築城正彦
1♀ 芦浦 小茂田悦子
6月7日 1♀ 芦浦 城戸加奈絵

6. カミキリ類

- (1) ヨスジアオカミキリ 5月3日 1ex 芦浦 境良朗
6月14日 1ex 芦浦 境良朗
- (2) キマダラカミキリ 6月20日 2exs 小船越 築城正彦
- (3) ゴマダラカミキリ 7月5日 1ex 芦浦 犬束卓也
- (4) ミヤマカミキリ 7月22日 1ex 賀谷 藤田恵美
- (5) ノコギリカミキリ 6月28日 1♂ 芦浦 境良朗
- ハラアカコブカミキリ 6月16日 2exs 佐須奈 築城正彦
- ミドリカミキリ 6月16日 2exs 佐須奈 築城正彦
- (6) ヒメクロトラカミキリ 5月31日 1ex 芦浦 境良朗
6月16日 1ex 佐須奈 築城正彦
- (7) エグリトラカミキリ 6月7日 1ex 芦浦 園部浩史
6月12日 1ex 芦浦 犬束卓也
6月14日 1ex 芦浦 小茂田悦子
6月16日 12exs 佐須奈 築城正彦
- (8) シラケトラカミキリ 6月27日 1ex 小船越 築城正彦
6月16日 4exs 佐須奈 築城正彦
- クビアカトラカミキリ 6月16日 2ex 佐須奈 築城正彦
- カンボウホソトラカミキリ 6月16日 1ex 佐須奈 築城正彦
- 過去に、厳原町浅モ、峰町大星山でごく少数が得られたのみ。
- (9) ヨツボシカミキリ 6月20日 2exs 小船越 築城正彦
- (10) キクスイカミキリ 6月9日 1ex 小船越 築城正彦
- ヨツキボシカミキリ 6月16日 1ex 佐須奈 築城正彦
- ホタルカミキリ 6月16日 3exs 佐須奈 築城正彦

(11)トガリシロオビサビカミキリ 6月21日 lex 芦浦 犬束卓也

○ キモンハナカミキリ 6月16日 lex 佐須奈 築城正彦

(12)ホソキリンゴカミキリ 5月31日 2exs 芦浦 築城正彦

本種は、上翅末端部の形状の違いから日本本土産と別種とする説があるが、今回ははっきりするまで上記の和名を使用しておく。

7. その他の甲虫類

(1) ヒゲコメツキ 5月31日 lex 芦浦 築城正彦

(2) ツシマコメツキモドキ 6月28日 lex 芦浦 田上雅彦

日本では対馬特産種。大陸に産するものとは形態上の差異が認められるというが、現在のところ同一種として取り扱われている。

(3) アシナガオニツウムシ 6月27日 lex 芦浦 園部浩史

(4) ハスジカツオヅウムシ 6月18日 lex 芦浦 藤田恵美

(5) オオツウムシ 6月28日 lex 小船越 築城正彦

(6) スジコガネ 7月13日 lex 賀谷 藤田恵美

(7) アシナガコガネ 7月5日 lex 芦浦 犬束卓也

(8) クロハナムグリ 5月31日 lex 芦浦 犬束卓也

6月16日 lex 佐須奈 築城正彦

(9) コアオハナムグリ 6月13日 lex 芦浦 築城正彦

7月7日 lex 賀谷 藤田恵美

(10) ユミアシオオゴミムシダマシ 6月4日 lex 芦浦 築城正彦

○ タイワンオオテントウダマシ 6月16日 lex 佐須奈 築城正彦

(11) ヨツボシケシキスイ 7月9日 lex 小船越 犬束卓也

○ ゴマダラコクヌスト 6月16日 lex 佐須奈 築城正彦

(12) クロボシツツハムシ 5月31日 lex 芦浦 築城正彦

(13) ヨモギハムシ 5月17日 lex 芦浦 築城正彦

8. その他

(1) ミミズク 6月13日 lex 芦浦 犬束卓也

(2) ツマグロヨコバイ 6月2日 lex 賀谷 藤田恵美

(3) ツチイナゴ 6月14日 lex 芦浦 藤田恵美

以上、57種が確認された。

Ⅱ．生物クラブについて一言

・特にヒゲコメツキ、カンボウホソトラカミキリを採ったときはうれしかった。この一年間、生物のことがよくわかり、これからの役に立つと思う。

(6年 築城正彦)

・クラブに入って、肉食のハンミョウのことや、きれいなタマムシのことなどいろいろわかった。ネムノキにいたトラフシジミのよう虫が成虫、つまりチョウになるまで何週間も調査してみたり、山に虫とりに行ったりしました。標本のつくり方もわかりました。

(6年 犬束卓也)

・おもしろかったことは、虫をとって名前を調べることでした。一度でいいから、めずらしい虫をとってみたい。

(6年 藤田恵美)

・浦浜小学校あとの運動場でめずらしいテントウムシを見つけました。そのときは、とってもとってもうれしかった。

(6年 小茂田悦子)

・チョウとりになると夢中になる先生や、色の黒い卓也くんなどと仲よくやれたからよかったと思う。

(6年 園部浩史)

・チョウのころし方や、トンボのオスとメスの見分け方とか採集のしかたなどいろいろなことがわかった。

(5年 大谷 恵)

・チョウをたくさんとったことや、チョウのもち方、ころし方など、いろいろ6年生の人や先生に教えてもらった。虫のさい集のしかたも教えてもらいました。

(5年 原田美由紀)

・生物クラブに入ってよかったと思った。春からの虫とりで虫の名前を少しは覚えつつもりですが、わからない虫がたくさんあります。先生よりももっともっと虫の名前を覚えたいです。それに、植物の名前も覚えたいになりました。木の葉や草花など、きれいだなあと思うだけでなく名前を調べたり、葉の色はどのように変化するのか調べてみたい。

(5年 城戸加奈絵)

・こん虫をとりに行ったり、ひょうほんにしたのでよかった。

(4年 大西信行)

・今までわからなかった虫の名前がわかって、とてもうれしかった。それにハンミョウのよう虫を草のくきでつるのがおもしろかった。

(4年 浦瀬節子)

久原小学校・校区内の蝶類採集目録
 杉 愷 ・ 久原小科学クラブ

本年（1985）、久原小学校科学クラブで採集した校区内の蝶類を報告する。目録中、A～Vで表した採集者の氏名は下記のとおりである。

- A: 荒木 功 B: 糸瀬隆章 C: 平尾勝也 D: 佐伯恒彦
 E: 早田哲也 F: 春日 靖史 G: 橋本誠二 H: 平間総好
 I: 佐伯公保 J: 友永和徳 K: 市山秀吉 L: 深浦広幸
 M: 部原正公 N: 上野博和 O: 須川慶一 P: 友永香代
 Q: 平井直人 R: 阿比留勝義 S: 春日 哲也 T: 浦瀬弘治
 U: 阿比留公孝 V: 松村政孝

A ~ M = 科学クラブ員 N ~ V = 手伝ってくれた人

— 蝶 類 採 集 目 録 —

() = 校区外

1. アゲハチョウ科

(1) アオスジアゲハ

- | | |
|------------------|------------------|
| ・ 6月12日 1♂ 久原 J | ・ 7月20日 1♂ 女連 F |
| ・ 7月20日 1♂ 女連 K | ・ 7月20日 1♂ 女連 F |
| ・ 7月20日 1♂ 女連 M | ・ 7月30日 1ex 鹿見 C |
| ・ 8月8日 1♂ 久原 E | ・ 8月12日 1♂ 久原 I |
| ・ 8月12日 1♂ 久原 L | ・ 8月17日 1♀ 女連 B |
| ・ 8月20日 1ex 鹿見 N | ・ 9月5日 1ex 鹿見 D |

(2) アゲハ

- | | |
|------------------|------------------|
| ・ 8月2日 1♂ 女連 F | ・ 8月3日 1♂ (阿須) C |
| ・ 8月5日 1♀ (巖原) K | ・ 8月8日 1♂ 久原 O |
| ・ 8月17日 1♀ 久原 D | ・ 8月22日 1♂ 女連 H |
| ・ 8月24日 1♀ 女連 B | ・ 9月7日 1ex 鹿見 L |
| ・ 9月7日 1ex 鹿見 I | ・ 9月7日 1♂ 女連 M |
| ・ 9月8日 1♂ 女連 P | ・ 9月20日 1♀ 女連 A |
| ・ 9月22日 1ex 女連 B | |

(3) モンキアゲハ

・ 8月3日	lex	(阿須)	C	・ 8月19日	1♂	女連	F
・ 8月24日	1♀	女連	M	・ 9月2日	1♂	女連	F
・ 9月3日	lex	鹿見	I	・ 9月5日	1♀	鹿見	D
・ 9月10日	lex	女連	B	・ 9月17日	lex	久原	I
・ 9月17日	1♂	鹿見	Q	・ 9月29日	1♂	女連	A
・ 不 明	1♂	女連	K				

(4) クロアゲハ

・ 7月26日	1♂	久原	L	・ 7月30日	1♂	鹿見	C
・ 8月2日	1♀	女連	B	・ 8月8日	1♀	女連	B
・ 8月13日	1♂	女連	B	・ 8月21日	1♂	久原	I
・ 8月28日	1♂	女連	H	・ 9月1日	1♀	(佐護)	F
・ 9月2日	1♀	女連	M	・ 9月5日	lex	鹿見	D
・ 9月15日	1♀	女連	J	・ 9月20日	1♂	女連	M
・ 10月2日	1♀	女連	A				

(5) カラスアゲハ

・ 6月12日	lex	久原	I	・ 7月17日	1♂	久原	K
・ 7月17日	1♂	女連	H	・ 7月22日	1♂	女連	B
・ 7月22日	1♂	女連	M	・ 8月1日	1♀	鹿見	C
・ 8月15日	1♂	(青海)	D	・ 8月21日	1♀	女連	B
・ 8月28日	lex	鹿見	R	・ 9月3日	lex	鹿見	I
・ 9月11日	1♀	女連	D	・ 9月 ?	1♂	鹿見	F

(6) ミヤマカラスアゲハ

・ 7月14日	1♂	鹿見	C	・ 7月18日	1♂	久原	J
・ 7月23日	1♂	久原	O	・ 8月20日	lex	鹿見	N
・ 8月28日	1♀	女連	S	・ 9月5日	1♂	女連	F
・ 9月6日	1♀	女連	J	・ 9月9日	1♀	鹿見	L
・ 9月9日	1♂	女連	H				

2. シロチヨウ科

(1) モンキチヨウ

・ 6月12日	1♂	久原	C	・ 10月19日	1♂	(佐護)	I
・ 10月 ?	1♀	女連	F	・ 不 明	1♀	久原	L

(2) キチヨウ

・ 6月19日	1♂	久原	B	・ 6月19日	1♂	久原	G
---------	----	----	---	---------	----	----	---

- ・6月19日 1♀ 女連 F
- ・6月20日 1♀ 久原 J
- ・7月13日 1♂ 鹿見 C
- ・9月3日 lex 鹿見 I
- ・9月27日 lex 久原 I
- ・6月19日 1♂ 久原 H
- ・7月9日 1♀ 女連 K
- ・8月13日 1♀ 久原 D
- ・9月3日 1♂ 久原 L
- ・11月5日 1♀ 久原 A

(3) タイワンモンシロチョウ

- ・6月19日 1♀ 久原 B
- ・6月19日 1♀ 久原 E
- ・6月20日 1♀ 久原 F
- ・7月22日 1♀ 女連 K
- ・9月5日 lex 鹿見 D
- ・6月19日 1♂ 久原 C
- ・6月19日 1♂ 久原 H
- ・7月3日 1♀ 久原 A
- ・8月26日 lex 鹿見 G
- ・9月7日 lex 久原 L

(4) モンシロチョウ

- ・6月6日 1♀ 久原 E
- ・6月12日 1♀ 久原 C
- ・6月12日 1♂2♀ 久原 D
- ・6月12日 1♀ 女連 K
- ・6月19日 1♂ 久原 B
- ・6月19日 1♂ 久原 J
- ・7月14日 1♂ 久原 E
- ・6月12日 1♀ 久原 B
- ・6月12日 1♂ 久原 F
- ・6月12日 1♀ 久原 I
- ・6月12日 1♂ 久原 H
- ・6月19日 1♂ 久原 I
- ・6月24日 1♀ 女連 A

3. シジミチョウ科

(1) ムラサキシジミ

- ・8月21日 1♀ 女連 A
- ・10月19日 lex 久原 I
- ・8月31日 1♂ 女連 B

(2) ベニシジミ

- ・7月13日 1♂ 鹿見 E

(3) ウラナミシジミ

- ・9月2日 lex 女連 F
- ・9月16日 lex 女連 H

(4) ルリシジミ

- ・7月24日 1♂ 女連 T

(5) ウラギンシジミ

- ・7月29日 1♂ 鹿見 E
- ・8月6日 1♂ 久原 I
- ・8月16日 1♂ 女連 M
- ・8月25日 1♀ 鹿見 R
- ・8月2日 1♂ 久原 L
- ・8月14日 1♂ 女連 T
- ・8月19日 1♂ 女連 P
- ・9月7日 1♀ 女連 H

・ 不 明 1♂ 女連 K

4. タテハチヨウ科

(1) ウラギンスジヒヨウモン

・ 10月19日 1ex (佐護) I

・ 10月19日 1ex (佐護) L

(2) クモガタヒヨウモン

・ 10月13日 1♂ 女連 J

・ 10月19日 1♀ (佐護) I

(3) ツマグロヒヨウモン

・ 7月23日 1♀ 鹿見 U

・ 7月23日 1♂ 鹿見 E

・ 8月17日 1♀ 鹿見 F

・ 8月18日 1♂ 鹿見 G

・ 8月19日 1♀ 鹿見 C

・ 9月3日 1♂1♀ 鹿見 I

・ 9月3日 1♀ 鹿見 L

・ 9月5日 1♂ 鹿見 I

・ 9月7日 1♀ 久原 M

・ 9月7日 1♂1♀ 鹿見 M

・ 9月7日 1♀ 鹿見 H

・ 9月30日 1♀ 久原 E

(4) コミスジ

・ 6月19日 1♀ 久原 C

・ 7月13日 1♂ 女連 F

・ 7月13日 1♀ 女連 P

・ 7月13日 1♀ 女連 H

・ 7月18日 1♂ 久原 E

・ 7月22日 1ex 鹿見 G

・ 8月15日 1♂ 女連 K

・ 8月31日 1ex 女連 B

・ 9月13日 1ex 久原 M

・ 9月23日 1ex 女連 A

(5) キタテハ

・ 6月19日 1♂ 久原 I

・ 6月19日 1♂ 久原 L

・ 6月19日 1♂ 久原 M

・ 7月18日 1♂ 女連 H

・ 7月20日 1♂ 女連 F

・ 7月22日 1ex 鹿見 G

・ 8月24日 1♂ 女連 J

・ 8月27日 1ex 女連 B

・ 8月 ? 1♂ 鹿見 C

・ 9月4日 1ex 鹿見 D

・ 9月30日 1♀ 女連 A

(6) ルリタテハ

・ 9月2日 1ex 鹿見 L

・ 9月5日 1ex 鹿見 D

・ 9月5日 1ex 鹿見 L

・ 9月7日 1ex 鹿見 I

(7) ヒメアカタテハ

・ 6月12日 1♂ 久原 J

・ 6月19日 1♂ 久原 K

・ 6月19日 1♂ 久原 D

・ 7月23日 1ex 鹿見 R

・ 7月25日 1ex 女連 A

・ 8月3日 1ex (阿須) C

・ 8月19日 1ex 女連 B

・ 8月29日 1♂ 女連 F

- ・9月3日 lex 鹿見 I
- ・9月14日 lex 女連 H
- (8) アカタテハ
 - ・6月12日 1♀ 久原 A
 - ・6月12日 1♀ 久原 O
 - ・6月18日 1♂ 女連 A
 - ・8月3日 lex (阿須) C
 - ・8月4日 1♂ 女連 H
 - ・8月14日 1♀ 女連 P
 - ・8月15日 lex (上見坂) D
 - ・8月19日 lex 鹿見 R
 - ・9月2日 1♀ 女連 F
 - ・9月11日 lex 女連 B
 - ・11月5日 1♀ 女連 A
- (9) リュウキュウムラサキ
 - ・7月23日 1♂ 鹿見 R
 - ・8月3日 lex 女連 V
 - ・8月19日 1♂ 女連 B
 - ・8月21日 1♂ 久原 A
 - ・8月22日 1♂ 鹿見 C
 - ・8月28日 1♀ 鹿見 G
 - ・9月7日 1♀ 鹿見 H
 - ・9月9日 1♂ 鹿見 I
 - ・9月9日 lex 鹿見 L
 - ・9月15日 1♀ 女連 J
 - ・9月15日 1♀ 女連 M
- (10) メスアカムラサキ
 - ・9月14日 1♂ 女連 H
- (11) ゴマダラチョウ
 - ・9月5日 lex 久原 L
- (12) イチモンジセセリ
 - ・9月2日 lex 女連 F
 - ・9月8日 lex 女連 H
- (13) ホソバセセリ
 - ・7月23日 lex 鹿見 G

5. セセリチョウ科

- ・9月3日 lex 鹿見 I

6. ジャノメチョウ科

- (1) ウラナミジャノメ
 - ・7月13日 1♂ 久原 E
 - ・7月13日 lex 鹿見 C
 - ・7月13日 1♂ 女連 P
 - ・7月17日 1♀ 久原 H
- (2) クロコノマチョウ
 - ・9月4日 lex 鹿見 D
- (3) ウスイロコノマチョウ
 - ・7月15日 lex 久原 C
 - ・7月20日 lex 鹿見 E
 - ・7月28日 lex 女連 H
 - ・8月14日 lex 久原 K
 - ・8月20日 lex 鹿見 R
 - ・9月4日 lex 鹿見 L

- ・9月4日 lex 鹿見 D
- ・9月5日 lex 鹿見 I
- (4) クロヒカゲ
- ・7月22日 lex 久原 I
- ・10月6日 lex 久原 I
- ・10月6日 1♀ 久原 L
- (5) ヒメジャノメ
- ・8月21日 1♀ 女連 P
- ・8月29日 lex 女連 H
- ・9月16日 lex 女連 M

7. テングチョウ科

- ・6月19日 1♂ 久原 F
- ・6月20日 1♂ 久原 J
- ・6月20日 1♂ 久原 M
- ・7月14日 1♂ 女連 H
- ・7月22日 lex 鹿見 G
- ・8月2日 1♂ 久原 L
- ・8月4日 1♂ 女連 B
- ・8月15日 lex(上見坂)D
- ・8月19日 lex 鹿見 C
- ・8月31日 1♂ 久原 A

以上、34種を記録した。

—活動をふりかえっての反省—

- ・今年蝶々をとってとてもおもしろかった。来年もまたしたい。
(6年 平尾勝也)
- ・と中であみがやぶれてぬったりしました。ねえちゃんと、となりの部落のほうまでとりに行ったりもしました。
(4年 友永和徳)
- ・色々な蝶の名前をおぼえることができうれしかったです。
(4年 深浦広幸)
- ・蝶々とりは楽しみながらできるのでうれしかったです。
(4年 平間総好)
- ・ヒメジャノメをとったときがとてもうれしかったです。
(4年 部原正公)
- ・キチョウの羽をあやまってさわってやぶってしまったのが残念だった。
(6年 早田哲也)
- ・さそいあって蝶々とりに行くととてもおもしろかった。
(6年 糸瀬隆章)
- ・はじめはモンシロチョウしかとりきらなかったけど、がんばってとったのでいろいろ集まってよかった。
(6年 佐伯恒彦)
- ・夏、暑くてもがんばってとった。
(4年 佐伯公保)
- ・うまくとれるようになってうれしい。
(5年 春日 靖史)
- ・ガラスを破って4種類だめにして残念でした。
(6年 荒木功)
- ・ずっとつづけてよかった。
(4年 市山秀吉)

1985年・対馬の迷蝶
 杉 翫・境 良朗
 浦田 明夫・佐伯 公史

本年（1985）対馬各地で得られた迷蝶の記録を報告する。何といても最大のトピックスは、ルリウラナミシジミの大発生であった。また、ウスキシロチョウ、オジロシジミが採集されたことも注目値する。

ルリウラナミシジミについての生態を含めたデータ等は、別に稿を改めたいと考えている。

報告にあたり、貴重な資料を提供していただいた斎藤修二氏に謝意を表す。なお、目撃記録も多数あるが採用しなかった。

種別採集記録

1. ウスキシロチョウ

・7月21日 1♂1♀ 豆蝋（杉）

2. オジロシジミ

・10月10日 1♀ 美津島町焼松付近（境）

3. ルリウラナミシジミ

・9月8日 3♂2♀ 豆蝋（境） 2♂2♀ 豆蝋（浦田）
 ・9月12日 1♂2♀ 豆蝋（浦田） ・9月14日 11♂8♀ 豆蝋（杉）
 ・9月15日 9♂10♀ 豆蝋（境） 1♂7♀ 豆蝋（浦田）
 ・9月26日 6♂11♀ 豆蝋（境）
 ・9月29日 8♂12♀ 豆蝋（境） 11♂17♀ 豆蝋（杉）
 ・9月30日 3♂4♀ 豆蝋（浦田） ・10月6日 15♂17♀ 豆蝋（境）
 ・10月13日 27♂18♀ 豆蝋（境） 7♂9♀ 豆蝋（境千寿子）

- ・10月13日 1♂2♀ 豆蝋 (浦田) 2♂ 大綱 (佐伯)
13♂25♀ 美津島町焼松付近 (杉)
- ・10月15日 1♂3♀ 美津島町焼松付近 (境)
- ・10月17日 33♂20♀,54exs 豆蝋 (杉)
- ・10月20日 17♂7♀ 豆蝋 (杉)
- ・10月30日 1♀ 巖原町万松院付近 (境)
- ・11月1日 4exs 豆蝋 (杉) ・11月2日 1exs 豆蝋 (杉)

3. メスアカムラサキ

- ・7月22日 1♀ 豆蝋 (杉) ・8月11日 1♂ 千俵 山 (杉)
- ・8月19日 3♀ 豆蝋 (杉) ・8月20日 1♀ 巖原町宮谷 (斎藤修二)
- ・8月24日 2♂ 豆蝋 (境) ・8月26日 2♀ 豆蝋 (境)
- ・9月13日 1♀ 芦浦 (境) ・9月29日 3♀ 豆蝋 (杉)
- ・10月11日 1♂ 芦浦 (境) ・11月2日 1♀ 豆蝋 (杉)

4. リュウキュウムラサキ

- ・7月22日 1♀ 豆蝋 (杉)
- ・7月29日 1♀ 豆蝋 (杉) 1♀ 豆蝋 (境)
- ・7月31日 1♀ 仁田 (境) ・8月18日 2♂2♀ 豆蝋 (境)
- ・8月19日 2♂2♀ 豆蝋 (杉) ・8月22日 1♀ 久原 (杉)
- ・8月23日 1♀ 久原 (杉) ・10月6日 1♂ 豆蝋 (境)

5. ウスイロコノマチョウ

- ・7月15日 1ex 久原 (杉) ・8月19日 1ex 豆蝋 (杉)

このほかにも、本誌に久原小科学クラブ員による記録があるので参照されたい。

対馬において、「迷蝶といえば豆蝋、豆蝋といえば迷蝶」といわれている。確かに豆蝋は迷蝶の飛来地として最適な地理条件を備えているが、久原の今回の記録からも、もっと西海岸全域に調査の目を向けるべきだろう。

志多賀川の各流域における岩石の大きさ

小宮秀光・志多賀中3年生

はじめに

3年生の教材の中に「大地の変化」の中の「けずられる大地」がある。そこでは、地層のでき方、岩石の種類についての学習がある。そこで、時間的余裕があったので何か大きな課題に取り組ませてみようと思い、この計画を立てた。

テーマ

授業の中で、川の三作用について学習している。大水の時生じる川底や土手をけずる侵食作用、それを流れのゆるやかな所まで運ぶ運搬作用、これらの作用によって大きな岩石はより小さな岩石になっていく。また、たい積する時、流れの速さに関係してゆるやかな所ほどたい積物の大きさが小さい。

一応基礎的な知識は身につけているので、これを野外に出て実際はどうなっているのか、3年生全員の合同研究とした。

指導時間 8時間

- | | |
|------------------|-----|
| 1. テーマ設定、実験方法の説明 | 1時間 |
| 2. 野外測定 | 3時間 |
| 3. データ処理 | 2時間 |
| 4. 研究結果のまとめ | 2時間 |

指導方法

まず1時間目に、川の各流域において岩石の大きさは違っているが、これは何と関係があるか予想を立てさせる。期待どおり、水の流速と関係があるだろうと出た。活動は、まず班を4つに分けデータ採集をさせ、これが出そうとレポート作りにとりかからせた。各班に仕事分担をさせ、最後に、全員の考察をまとめさせた。

レポート 次ページへ

研究名称

「 志多賀川における岩石の大きさ 」

目的

志多賀川を上流・中流・下流・河口の四地点に分け各地点の岩石の大きさを調べ、上流から河口にかけての岩石の変化がどのようになっているかその変化が流水の速さと関係あると予想して調べを進める。

研究者

原田勝彦 岡野忠利 清水剛 井上就人 大江成彦 八坂幸喜
小田夏子 井上和子 藤本喜代 阿比留咲花美 山根美奈子 岡野静子

実験方法

1. 各班で1地点を調べる。

上流：A班 中流：B班 下流：C班 河口：D班

2. 岩石の測定は、まっすぐな川の中央の岩石を使って測定する。

各岩石は、まばらに採集し、1地点につき50個をメドにする。

3. 岩石について調べる時に、流水の速さを調べておく。

流水の速さは、サンプル管を川の中央で浮かせ、ある地点から5秒間に流れる距離を測定する。

※正式に流水の速さを測定するには、大水の時など川の流水が速い時に測定しなければならないが、大水の時は危険なので測定できない。

しかし、ふつうの状態の川でも、上流や下流での流水の速さはわかるので、ふつうの状態の川で測定する。

4. 大きさの測定方法

岩石の体積は重さに比例するので、重さを調べ、それに0.4をかけると体積が求められます。

結果

1. D班 サンプル数50

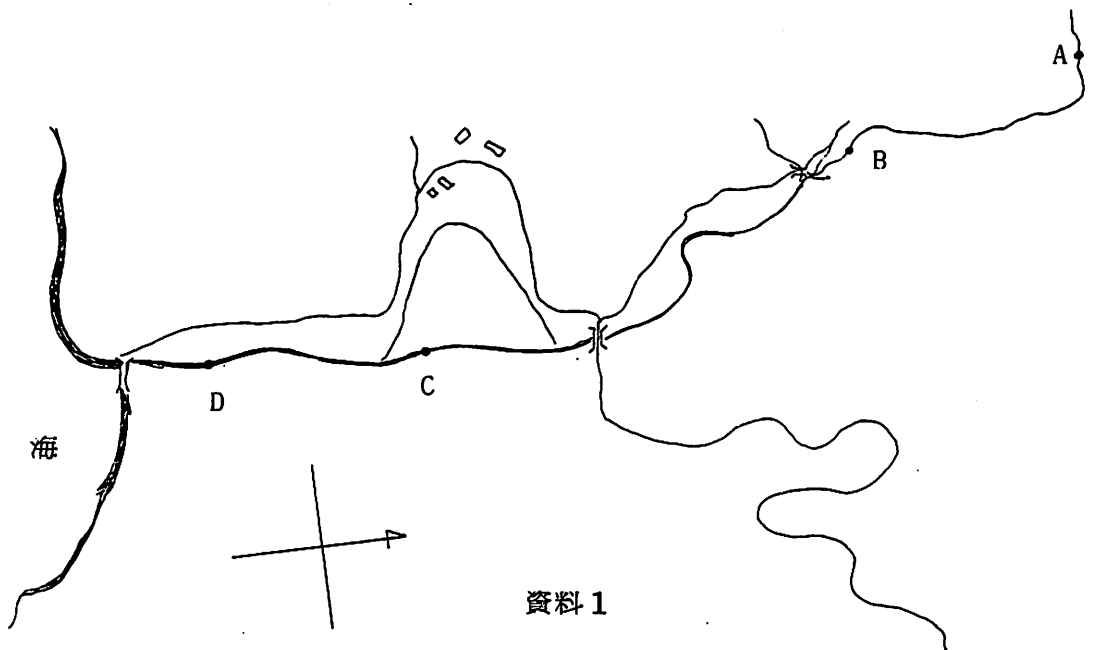
・川の環境・・・川幅が広く、ゆっくりした流れで小石が多くある。

満潮になると、海水とたん水がまざる、そして、水かきが少ないので一定の所しか水の流れがない。

・岩石の形・・・小さな岩石ばかりで、ほとんどは丸か丸味をおびた岩石

・流水の速さ・・・5秒間 74cm 秒速 / 4.8

・体積の平均・・・ / 8 cm³



資料1

2. C班 サンプル数50

- ・岩石の形・・・角ばっていても丸味をおびている石が多かった。全体的に角ばっているものが多かった。
- ・流水の速さ・・・5秒間 70 cm
- ・体積の平均・・・ $6 / \text{cm}^3$

3. B班 サンプル数50

- ・川の環境・・・上流から、まあまあ速い水が流れていた。大きな石が所々にあった。石にはこけが生えていた。
- ・岩石の形・・・ところどころ、丸いのや平たいのがあるが、だいたい角ばっている。

4. A班 サンプル数50

- ・川の環境・・・流水が急で、その下の水たまりはゆるやかになっている。岩石がかたむいていて、そこにはこけや草が生えている。
- ・岩石の形・・・でこぼこが多く、かどばっている。
- ・流水の速さ・・・5秒間 4 m 30 cm
- ・体積の平均・・・ 398655 cm^3

考察

◎石の大きさは、上流にいくほど大きくなっていった。これは川の流れに比例している。それは、川の流れが速くなると小さな石は流されてしまう。一方、流された小さな石は、流されずにそこにたまっていく。その結果、

上流に行くほど石が大きくなり、河口に近くなると小さくなっている。だから、石の大きさと水の流れは比例しているといえる。(資料参照)

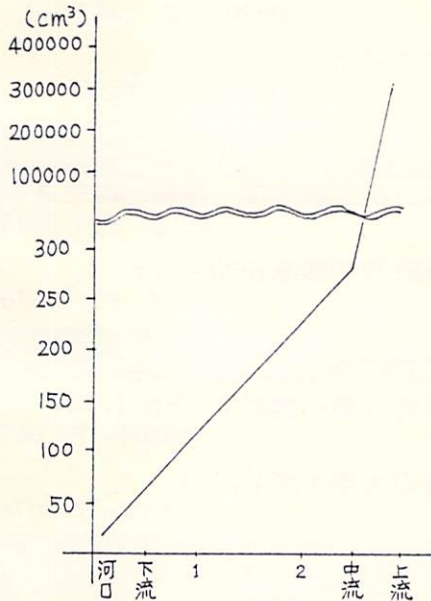
◎河口の岩石の形は丸味をおびている。下流は、全体的に角ばっているものが多かったが、丸味をおびているものもあった。中流は、ほとんどの岩石が角ばっていたが、なかには平たいものや丸いものもあった。上流では、でこぼこが多く、ほとんどの岩石が角ばっていた。

このことから岩石の形は、上流から河口に行くにしたがって、岩石は丸味をおびて小さくなっている。

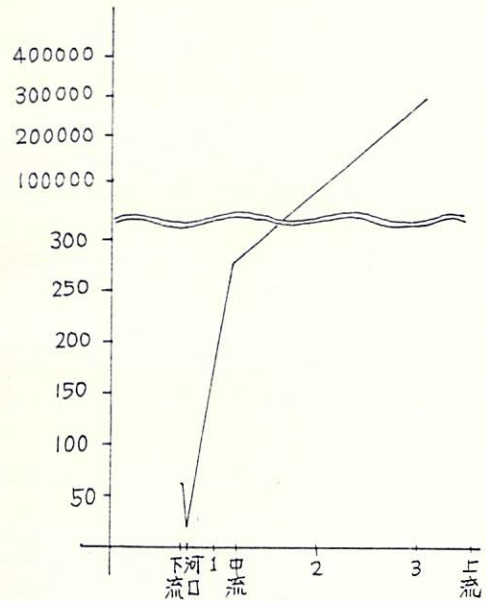
◎流水の速さを調べた結果は、上流に行くにしたがって流れが速くなるだろうと予想していたが、河口より下流の方が流れがおそかった。

このことは、潮の干満に関係があるのではないかと思う。

(注) これは、河口は潮のみちひきにコントロールされやすいからで、実際は、下流より河口の方が流れはおそくなります。



資料 2



資料 3

おわりに

研究授業とのかねあいもあって、時間が少し足らず、考察が最後まで全員でやれなかったのが残念だった。しかし、どうにか時間外にまとめていた。矛盾すべき点はたくさんあるが、今後の参考になった。

(峰町立志多賀中学校)

長崎県生物学会対馬支部会員名簿

(昭和60年/2月現在)

1 内野俊哉 (44)
(勤)

(現)

2 浦川虎郷 (56)
(勤)

(現)

3 浦田明夫 (51)
(勤)

(現)

4 江島正郎 (34)
(僅

学校

退)

5 大浦千代子 (26)
(勤)

(現)

6 岡部虎男 (76)
(現) 〒817 下馬

7 日下部 潔
(現) 〒817- 04

8 国分英俊 (36)
(

(

9 佐伯正発 (46)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111 計 10

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

10 斎藤修二 (27)

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

11 境良朗 (32)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

12 修行寛 (40)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

13 杉憲 (28)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

14 長瀬節雄 (43)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

15 永留浩 (48)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

50

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

06

16 西山輝男 (38)

(勤) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

(現) 〒817 下城高瀬町 1-1-1 電話 225-1111

17 平山俊章 (24)

(勤) 〒817-01 下県龍美線尾崎大字尾崎乙573-3 尾崎小学校
09205-1-2111

(現) 〒817-01 下県龍美線尾崎大字尾崎乙190-11
09205-1-1811

18 邑上益朗 (35)

(勤) 〒850 長崎市上小島1-13-1 長崎商科大学
0958-31-3131

(現) 〒850 長崎市上小島1-13-1
0958-31-3131

19 山本愛三 (54)

(勤) 〒851-01 長崎市上小島1-13-1 野根海産高等学校
0958-31-3131

(現) 〒852 長崎市上小島1-13-1
0958-31-3131

20 吉田一彦 (31)

(勤) 〒817 下県龍美線尾崎大字尾崎乙573-3 龍美小学校
09205-1-2111

(現) 〒817 下県龍美線尾崎大字尾崎乙573-3
09205-1-2111

21 吉田喜美明 ()

(勤) 〒

(現) 〒 佐賀県唐津市幸洲3845-1

22 木原修一 (22)

(勤) 〒817 下県龍美線尾崎大字尾崎乙573-3 龍美小学校
09205-1-2111

(現) 〒817 下県龍美線尾崎大字尾崎乙573-3
09205-1-2111

23 小宮秀光 (25)

(勤) 〒817-21 上県佐賀市大字多喜195-2 志多喜小学校
09208-2-0004

(現) 〒817-21 上県佐賀市大字多喜195-2
09208-2-0046

24 築城正彦 (12)

(現) 〒817-11 下県龍美線尾崎大字尾崎乙573-3

ヒ ト ツ バ タ ゴ No. 3

長崎県生物学会対馬支部報

発行所 長崎県生物学会対馬支部

長崎県下県郡厳原町東里 / 20
09205- 2- 1114

振替 福岡 1- 2 7 4 0 0

発行日 昭和 6 0 年 1 2 月 1 5 日

編 集 境 良朗 ・ 浦田明夫

目 次

- フクリンオニユリの発見 国分英俊・岡部虎男 . . . 1
- アオサギの生態 平山俊章 2~10
- 野鳥の声のききなし 浦田明夫 11~13
 - ・ ランの無菌培養のすすめ 国分英俊 13
- 対馬におけるナガサキアゲハ
の分布 境 良朗・杉 憲
14~16
- ツシマジカは害獣か!! 国分英俊 17
- 新しい対馬の帰化生物 浦田明夫 18~19
- トンボの摂食行動に関する知見 境 良朗 20~21
 - ・ ツシマヤマネコを目撃記録 江島正郎・蒲地伸一郎 . . 21
- 対馬のセイタカアワダチソウ
とウシガエル 江島正郎 22
 - ・ ムツボシアシナガハナアブの記録 . . . 境 良朗 23
 - ・ キツネノマゴの白色花 浦田明夫 24
 - ・ シロバナツユクサの記録 江島正郎 24
- 北部小校区内で得られた昆虫類
について 境 良朗 ほか . . 25~29
- 久原小校区内の蝶類採集目録 杉 憲 ほか . . 30~35
- 1985年・対馬の迷蝶 杉 憲・境 良朗
浦田明夫・佐伯公史
36~37
- (特別寄稿)
- 志多川各流域における岩石の大きさ . . 小宮秀光 ほか . . 38~41
 - ・ 会員名簿 編集部 42~44
 - ・ 編集後記 45